

日原正彦さんが昨年暮れに出した初めての俳句集『てんてまり』が日本詩歌句協会、詩歌句大賞の奨励賞を受賞した。

本誌でも、紀の崎茜さん、草野早苗さん、秋田律子さん、近澤有孝さんが俳句を発表しているし、豊原清明さんは今年二冊目の句集を出した。中上哲夫さんも俳句を書いているが、ぼくは俳句はまったくの素人で、「俳句の良さ」がわからないので、いつもいつも勝手読みをさせていただけである。

ロラン・バルトはニッポン見聞録の『表象の帝国』(ちくま書房)のなかで、俳句の「言語に見切りをつける」ということに感心してつぎのようにいっている。

「たいせつなのは簡潔であること(つまり意味されるものの濃密を減少させることなしに、意味するものを要約すること)ではなくて、逆にその意味の根源そのものに働きかけることなのである。俳句の簡潔は形式のためのものではない。俳句は、短い形式に還元された豊かな思念ではなくて、一挙にその正当な形をとった短い終局なのである。」

この本を読んだとき、おお、そうかそうか、とフランス人の言に首肯してしまったのだが、実際に俳句を詠んでいる人たちはこのことをどうおもっているだろう。

まったく俳句には無知なぼくだが、俳句をやっている知人が結構いる。句集をいただいてもろくに返事も書かないのだが(書けないといったほうが正確)、日原さんの受賞を機に最近いただいた句集を読みかえてみた。以下はその簡単な感想です。先に書いたようにぼくは俳句の良さがわかっていないので、

ない。どこまでも天空にむかって幹も枝も。夏空にむかつて一本の木が立っている、むこうにも一本、そのむこうにも一本。まるで孤独が孤独を呼び合っているような木々である。

まあこれでいいんだ秋の雲と行く

この地上にはあれやこれや雑念が渦巻いている。ぼくなんかこの歳になってもその雑念に身も心も惑わされつづけている。では一歳年上の日原さんは惑わされていないかといえば、そうでもないだろう。日原さんにも日原さんなりの「あれやこれや」の雑念が去来しているだろう。それでも秋の雲を見ているとふと「まあこれでいいんだ」とおもってしまった。おもってしまった以上はそういう自分に殉ずるしかない。雑念のむこうにはなにがあるかわからないが、まあ、秋の雲に任せてみようじゃないか。そういう潔さが日原さんにはある。

骨は焼かれ枯葉は踏まれ音を立つ

日原さんもぼくももうすぐ死んでしまう。骨は焼かれるときどんな音を立てるのだろう。自分の骨の音を聞いてみたいものである。いつでも自分の骨の音を聞く準備はできている。だが、自分の骨の焼かれる音を聞けるのは他者だけである。

てふてふと橋を渡りて別れけり

佳句を掴み損ねているとはおもうので、極私的好み、です。

まずは日原さんの『てんてまり』(ふたば工房)。結社や同人誌には参加せず、新聞、雑誌、テレビなどの「俳壇」に投稿して採りあげられた作品をまとめている。

蛇穴を出て開演五分前
両眼を花いっぱいにして帰る

日原さんは最近大病をして復活した。40年来の友人としては嬉しいかぎりである。体調の回復した日原さんがひさびさのコンサートに出かける。たぶんクラシックのコンサートなのだろう。心がすこし弾みながら幕が開くのを待っている。

日原さんは絵画も好きである。ひさびさの美術館からの帰り道、「多くの画家たちの絵をみているうちに、そうだおれもつと書かなきゃとおもったことでした」と言っていた日原さんの両眼は絵や詩の言葉で満開である。病を脱してふたたび日常を取り戻した日原さんの、声はおおきくないが、もうすこし生きてもみよう、というおもしろい音が滲んでいる。

立つといふこと美しき夏の木々

日原さんにはこういう美学がある。地面からすくつと立ち上がって天空を目指している木への憧れだろうか。樹木についての詩もたくさん書いている。枝が横に広がっている木は美しく

日原さんは奥さんを亡くされている。奥さんと二人三脚でここまでできたのに、橋を渡ると別れなければならなくなった。それはすでに予告されていたことではあったが、さみしいものだ。しかし、ひととひとはつねに別れていく存在だ。

もう少し静かに咲けよ凌霄花

凌霄花の花は美しい。いや、美しいというよりは派手だ。自分の存在をあちこちに示している。そして蔓をほかの木々にまきつかせ、これでもかというほど自分を主張する。自分の美を主張するためには他人のことなどおかまいなしだ。日原さんの性格からすれば、「もう少し静かに咲けよ」と言いたくなるのもわかる。君はそれほど美しいんだから。

札幌で『奥の細道 別冊』という冊子に刺激的な評論を書いている嵩文彦さんは、句集『ダリの釘』(未知舎)のあとがきで、「季節語は自由闊達なイメージの飛翔を妨げている。それが類想類句を量産させている。そうも思えます。今回、無季の句も作ってみました。定型一行詩ということになります。(略) 季語の極枯を外しながら詩心の自由度を高めつつ、なお俳句であり得ることはできないか? 私が考えていることはそのことです。」と書いている。

新春の脳髓を打つダリの釘

ダリの絵が灼けたる釘を愛す夏

少年の切れよき股に蟬生る

励起する紅唇夏野をひたすらに

それぞれの愛しき舌が脳を舐む

鳥の目の中にうごめく蝶の舌

ふるふると汗する昼の星あらむ

眼球の海深まれり夏の月

錆色の林檎の芯に父とゐる

列車ゆく雪深き夜の喉頭部

二月去る母の抱ける擬卵割れ

かつては詩を書いていただけに伝統的な俳句とは一線を引き、普通ならふりむきあうこともないだろう言葉や巧みに結びつけ、新たな解釈の出会い、新たなイメージの喚起、そこから導かれる読者の想像力、そんなものに言葉を委ねている。定型一行詩と自認するのも頷ける。

だから、「現代の伝統俳句は先祖返りしているのである。自己主張はもうこりこりと思うようになっているのである。でも、それではあまりにもこらえ性が無すぎはしまいか？ 多分、現代行われている伝統俳句はそうなのだ。客観写生、花鳥諷詠に従順に、できるだけ自分を表現せぬように努めている。かつてあった『芋の露連山影をただしうす』（飯田蛇笏）や『夏の河赤き鉄鎖のはし浸る』『夏草に気罐車の車輪来て止まる』『山口誓子』などの独創、主張は姿を消した。」（『奥の細道 別冊』第六号（2016年6月27日刊））と伝統俳句に疑問を呈し、みずからは

嵩さんの俳句が定型一行詩ならば、豊原さんの俳句もまた定型一行詩だ。生きて在ることの孤独感が全篇を貫いている。

詩集『夜の人工の木』で第一回中原中也賞を受賞し、颯爽とデビューしてから20年が経ち、豊原さんも30代最後の年になった。おっさんと呼ばれる年齢になった。

不登校、家庭内暴力、と少年の抱える困難さを体現してきた豊原さんは少年から青年に、そしてもうすぐ中年という括りにさしかかるのだが、その間ずうっと、この世間の生きにくさを抱えつづけてきた。それでも、「生者に歎び」のあることを願いながら生きている豊原さんは、その表現形式を詩だけではなく、シナリオ、俳句に求めて自分にとっての「歎び」とはなんのかを探しつづけている。その道程は父親との二人三脚とあっていい。しかし、父親と二人で、歩んできた道も「冷たい地面」でしかなかった豊原さんにとって「生者に歎びある」日があるのは奇跡に近いのかもしれないが、万年床の周りに雪だるまをおいてその冷たさを自分としている豊原さんに幸あれとおもわずにはいられない。

神奈川で『朱夏』という俳誌を主宰している酒井弘司さんの俳句は、前二者の「定型一行詩」とは違って、伝統的な俳句だろう（俳句のわからないばかりが簡単にこう言っているのだろうか）。もともと酒井さんの句は嵩さんのいうような弱腰の俳句ではない。ことさら自分であるということを書わずに、自分

現代俳句の道を進んでいくことを宣言している。

とはいっても伝統俳句をやっている人には、また別なおもいがあるだろう。自分を表現せぬことではじめて表現できることもあるだろう。

詩でもそういうことはある。自我を隠匿することで見えてくる世界の構造がある（とぼくはおもっているのだが）。世界と自他の関わりが透けてみえてくることもある。俳句の人にもそういう考えがあるのだろうか。それとも、自我の表出など世界の構造を見えるのになんの役にもたたないとおもっているのだろうか。そこらへんの機微はぼくにはわからないが、伝統俳句には伝統俳句なりの作法があつて、そのなかで表現とはなにかということを実践しているだろうとおものだが、それでも嵩さんはその作法は表現者として弱腰だといっている。

豊原清明さんの句集『手話する冬鹿』（マルコポ・コム）から。

奇声挙げ吾はサボテンの針を抜く

わが半日虚空千年春峠

身寄り無き馬の怒りや入梅す

葉桜や煙轡のごと擦れけり

法師蟬おらぬ相手の為に啼く

天高く生者に歎びあることよ

金星や冷たい地面父子ありぬ

万年床周りに置きし雪だるま

を立たせているとおものだが、読んだ人たちはどう受けとらるだろう。

俳句をやっている人とやっていない人では読み方も違うだろうし、基本的に、書かれたものは読者の偏見と誤読に任されるべきものだ、とおもっているので、どう読まれてもしかたのないところがあるのだが、（詩も俳句も）作品はどのように読まれたとしても、読みに耐えるだけの強度を持っていたい、とぼくはおもっている。もともとそれは書く側のちよつとした志みたいなものであるから、読者には伝わっても伝わらなくてもいいとおもっている。

句集『谷戸抄』（ふらんす堂）のあとがきには「『谷戸』は、丘陵地が侵食されて形成された谷状の地形。茅屋は、裏丹沢を眺める谷戸にあり、土を耕し地気を養いながら日常座臥の日々を送っている。」とある。

水使うこの世のならい春立てり

走り梅雨円空仏のひとりごと

禽獣のまなこ荒れゆく晩夏かな

千年の大樹の呼吸秋澄めり

秋気澄む人歩き木は立つたまま

少年に朝の黙あり百舌鳥ひびく

ぶうんと緑肺の中まで匂つてる

かなかな止み大きくなりし裏の山

花の下からだのどこも水奔る

十二月坂を登ってそうおもふ

土のこと誰もが忘れ四月の街
鬼やんま家を壊して出てゆけり
太陽が曲がってきたり蟬の朝
柀の花にさわればわれも水

「千年の大樹の呼吸秋澄めり」とか「秋気澄む人歩き木は立つたまま」、「かなかな止み大きくなりし裏の山」といった句には自然のダイナミズムが感じられて酒井さんの視座の大きさを感じる事ができる。

また、「土のこと誰もが忘れ四月の街」は福島の捨てられた街のことだとおもうが、人は逃げればいいが、土は逃げる事ができない。補償せよ、とも言わない。じつと耐えているだけだ。その土と生きた人もまた、じつと耐えているだけだ。

85歳になったたむらちせいさん（高知県佐川町）の『たむらちせい全句集』（沖積舎）をいただいたのは二年前だった。そのころは永年主宰してきた句誌『蝶』の発行人を退かれていた。

昭和33年ごろだっただろうか。教職員に対する勤務評定というものがおこなわれ、高知では勤務評定をする側の校長の反乱などがあり（高知ではたしか七人か八人の校長が処分された）、キンピョウ闘争なるものがおこなわれた。ぼくは小学五年生で、担任の教師が「キンピョウに行ってくる」と出かけ、授業が中止になったりしていた。「キンピョウ」がなんだかわからなかったが、「大変なこと」だった。

たむらさんはこのキンピョウ闘争に参加し、上から睨まれたらしい。闘争後、たむらさんは高知県の孤島、沖の島に転動していくのだが（左遷かもしれないが、左遷といってしまつたら沖の島の中学校は左遷された教師の行く学校になってしまつ）、この孤島が気に入つたらしく、本土への転勤を一度は断つていく。たむらさんにとっては沖の島の暮らしと人々とはいいい出会ったのだらう。

第二句集『めぐら心経』の序詞で伊丹三樹彦がたむらさんの句の特長をうまく書いている。

「例えるならば

たむらちせいの俳句は

熱帯性の榕樹であろう

挫折を根として生い

反逆を幹として聳ち

幻想を葉として繁る」

海渡る 贗造真珠で妻を飾り

爪ほどの夕月 過労の冬眠 寝る

網つくるうは老漁夫の業 墓山負い

三十路後半葱坊主おおかた折れた

流人の井戸汲めとつるべがある 朝鵬

晩夏のガラスかついでガラスに透く少年

左遷されたらされたで桃が咲いている

まつろはぬものを柄とす国の果

両腕羽はたくごとく咳き込めり

夕焼へ手をあげ手をあげ死んでいつた

土佐を打ち終へたる海を遠眺め

一本の冬木のために地平あり

沈丁花の匂ひを鍵の在処とす

3月11日フクシマ

何かありましたか蜃気楼のやうですが

前後左右に死者の声あり春の浪

神戸の鈴木漠さんは『おたくさ』という俳誌を主宰している。その俳誌では連句というものを実践されていて、今年出た『連句茶話』（編集工房ノア）のなかでこう書いている。

「十九世紀末、詩歌の改革者正岡子規があらわれて『発句（連句の第一句）は文学なり。連俳（連句本体）は文学にあらず。』と論断するまで連句は、和歌や漢詩以上にわが国の民衆から最も愛された国民文学でした。しかもその歴史は、八世紀の『古事記』や『万葉集』よりもはるかに古く古代中国の漢詩聯句にまでさかのぼるのです。その間に蓄積された膨大な詩歌創作の

ノウハウや修辭法が、近代の文芸観にスポイルされた詩歌人たちによって連句が顧みられなくなった結果、おおむね忘れ去られたしまったのです。このことは、豊かな言葉の富の喪失または崩壊という現象以外の何ものでもないと思うのです。」

連句というのは「座」というものがある、何人かが交互に詠んでいくそう。とうぜんその場にはある種の親和力というものがはたらき、人と人の感情が交差し、想像力が絡み合い、

発句からはおもいもしなかった地平に言葉が届いていくというスリリングさがあるのではないかと、おもうのだが、連句の良さが分からないからなんともいえない。

詩はたかだか130年ちよいのもので、伝統とはまったく無関係な分野である。それに、わが国の民衆から愛されたという実感もない（中也や賢治は愛されたといえるかもしれないが）。おまけに密室でひとりてこそ書いている（連詩という形式もあるのだが、詳しくはしらない）。俳句には吟行といって、人数を組んで俳句を詠むという作法もあるが、詩にはそういう作法がない。春になったから桜でも見に行つて詩を書こうか、という風流さもない。朗読会という作法があつて、数人から数十人の前で詩を読むこともあるのだが、ぼくは朗読会は好きではない。

連句集『滅紫帖』（編集工房ノア）のなかから巻頭の連句。

初明り（表合八句）——尻取り押韻

——甲午年 歳旦馬尺し

雪の駅雪の厩も初明り

飯の宿りて年の旨酒

叫ぶ子に花降りしきる駒遊び

聳ゆる海市騙し絵のやう

家移りの町に驚くうららかさ

重なる不首尾恋のトラウマ

午の貝逢瀬の果ての白き月

付き馬撒いて霧の道行

鈴木 漠（新年）

永田 圭介（新年）

三木 英治花

梅村 光明（春）

圭介（春）

漠恋

光明（月恋）

英治（秋恋）

* * *

草野早苗さんが詩集『夜の聖堂』（思潮社）で第48回横浜詩人会賞を受賞した。

この詩集の特長は、草野さんが無意識のうちに抱えてしまつた言葉、旅をし、人と会い、風景とすれ違い、思ったこと、思わされたこと、考えたこと、考えさせられたこと、捨てたもの、捨てたもの、そんなものがしらずしらずのうちに草野さんの無意識を形成し、それら、人であり物であり風景であり、という「こと」が言葉として現前し、この一冊として結晶している、というところにあるとおもう。

人は多分に詩を書くとき、自分では思いもよらなかつた言葉に支配されることがある。そのとき、作者のなかに蓄えられていたものがどんな姿形をして言葉としてでてくるのか、詩とはそういうものだとおもう。

集中で一番好きな詩「羊と私と驢馬と」を転載する。

人の書いた文章から

スペインの詩人J・R・ヒメネスは驢馬を飼っていて

いつも語りかけていたことを知った

驢馬のプロテローロは詩人にとつて親友で

死後は丘にある松の木の根元に埋めた
『プロテローロとわたし』という本も書いたそうだが

ああ、この詩人の夢は計り知れない
共通言語を持たない驢馬を友に選んだからには
心で言葉を交わしたにちがいない

それは私の最初で最後の願い

左に羊 右に驢馬

柔らかな体の匂い

どこを見ているのか分からない羊

壁に沿って坂道を下りてくる驢馬

私が羊と驢馬より先に死んだら

庭の隅に灰を撒いてほしい 少しでも

青い草々が庭から野へとひろがり

シロツメクサがひろがり

家の窓に若葉の掛かる木の下で

嬉しそうに立っている驢馬が見える

どこを見ているか分からない羊

斜めに注ぐ金色の陽射し

羊と私と驢馬の永遠

左に羊、右に驢馬、柔らかな体の匂い、そんな羊と驢馬に行
く末をまかせて生きること。それは「生きる」というよりも

「なんてこつた」

「いったいどうすれば」

さっぱりした性格のヨセフでも

灰色の戸惑いが時々心に浮かんでくる

「まあ、いいや

すべては神様の御心のままに」

ヨセフは子どもをかわいがる

マリアのことはうっとりするほどに好き

受難のキリストを抱いてうつむくマリア像

半分眠っていた私に織布をかけてくれたのは

気遣いの深いヨセフだろうか

蠟燭の灯りが消えるころ

ドアを開けて外に出る

庭で洗礼者ヨハネが

池に足を浸して

両手で白い落花をすくっていたが

「こんばんは」の挨拶と同じ長さで

長髪を揺らせて会釈した

「活かされる」ということ。そして死んだら灰を撒く。そういう「生と死」。人も羊も驢馬も、たつたそれだけの存在。自然が育む命とは「たつたそれだけの存在」であること。ヒメネスも草野さんも「それだけの存在」であることをまるごと受けられている。

表題作「夜の聖堂」を転載する。

坂道でヨセフとすれ違った気がしたので

久しぶりに行ってみようと思つた

死者のための蠟燭が並び

陣内は灯りにゆるく揺れている

左手から始まる十字架の道行きの

十三枚のテラコッタ

聖体の存在を示す紅いランプ

ヨセフの像は左手の奥

この善良を具現化した人の

苦悩を推し量るのはなぜか楽しい

工務店からの派遣労働

いつのまにか身ごもっていた婚約者

ベツレヘムへの遠く長い徒歩の旅

身重の妻を驢馬に乗せて

挙句の果ては星降る厩での出産